

学位請求論文（主論文）の要約

『J.S.ミルの社会主義論—体制論の倫理と科学』

御茶の水書房、2014年。

目次

はじめに

第1章 若きミルの思想形成

第2章 ミルの社会主義論の形成

第3章 ミルの社会主義論とハリエット・テイラー

第4章 『論理学体系』の方法から『経済学原理』の社会主義論を読む

第5章 遺稿「社会主義論」の再検討

第6章 ミルの社会主義論に対する評価とエッカリウス（マルクス）のミル批判

第7章 マルクスのミル批判に対するミルの思想からみた反論

第8章 ミルの体制論の倫理と科学

はじめに

本稿は、ミル(John Stuart Mill, 1806-73)が生涯問い続けた経済体制の問題に焦点をあてて、思想形成および方法論を含む思想的特質からミルの社会思想を捉えることを目的とする。それは同時に、ミルの社会主義論に関する研究者の解釈の隔たりを縮める試みでもある。ミルは対立する思想にある「半面の真理(half truths)」や人間の思考の「多面性(many-sidedness)」を重視し、異質な思想の調和を図る点で幅広くスケールの大きな思想家である。ミルの思想が多様性に富んでいることに加えて彼の表現が多義的であることによって、ミルの社会主義論の解釈が分かれている。

ミルの思想の解釈について、彼の思想が両義性(ambivalence)を許容している(Berlin 1969)のか、あるいは首尾一貫した一元的な思想である(Ryan 1987)のか、未だ決着をみない議論がある(J. Gray, G. W. Smith 1991, 3-5/ 8-10頁)。ミルの社会主義論も、ミルがいかなる体制を志向していたのかについて、研究者の間の解釈の相違は決着せずに放置されたままである。

バーリンとライアンが対立するミルの思想における両義性と首尾一貫性の問題について、筆者はミルの社会主義論に関しては両義性を含意したまま首尾一貫しており、この両義性を含意する思想は多様性を重視するミルの思想的特質の表れと理解する。問題は、ミルの思想体系の中でミルが自分の思想として両義性を許容したのか、あるいはそれがミルの意図しない整合性なき矛盾なのかを見極めることが重要なのである。著者はミルの社会主義論の思想は、次の論点を除けば、倫理と科学の調和する思想として、両義性を含意しつつ

首尾一貫していると解釈する。

ミルの社会主義論の解釈で、問題を更に複雑にしているのは、私有財産と市場競争を基礎とする現体制から労働者アソシエーションへの体制移行を予測するハリエット・テイラー・ミル夫人（*Harriet Taylor Mill, 1807-58*, 以下ハリエットという）の所説をミルが受け入れて、『経済学原理』（1848-71, *Collected Works of John Stuart Mill*, University of Toronto Press, II, III、以下 *CWII*, IIIと略す）の第4編第7章「労働階級の将来の見通しについて」（*CWIII*、以下「将来の見通し」の章という）に存在することである。そしてミルが『ミル自伝』（*CWI*、以下『自伝』という）でこの章が「全面的に彼女の恩恵を受けている（“entirely due to her”, *CWI 255/ 343* 頁）」と述べ、彼女の思想を採り入れた第3版（1852）の改訂の意義を強調しているために、「将来の見通し」の章が彼女の影響のもとにミルが同意したことを前提に、この章が多くの研究者の間で重視されることになった。

例えば、イギリスの社会主義史の名著といわれるマックス・ベア『イギリス社会主義史』（1919,20）においては、「将来の見通し」の章がミルの社会主義論を代表する著述であり、この章はミルが社会主義論を探究した軌跡を示すものと理解されている（*Beer 1921, vol.2, 187-189/ (3)275-278* 頁）。またシュンペーターも『経済分析の歴史』で「将来の見通し」の章をミルの社会主義論の最終的な立場であると解釈している（*Schumpeter 1954, 531,532/ (中)288-290* 頁）。シュンペーターの解釈が後世に及ぼした影響は大きく、その流れにある研究とそれとは隔たりのある解釈による研究に分かれて、ミルの社会主義論の評価が研究者の間で定まらないのが現状である（*Rosen 2013, 180-211*）。

こうした状況に鑑み、本稿はミルの社会主義論を彼の思想の全体像を意識した広い視角から捉え、ミルの思想形成と思想的特質からこれを理解するようにつとめる。ミルのいう半面の真理を総合した思想の全体からみると、独自の社会改革の理想を目指すハリエットの予測を含む思想をミルの思想として重視する解釈は、多様性に富むミルの思想の一面だけに光をあてていると解釈されるからである。第1章は、第2章からの社会主義論の検討の理解を助けるための予備的考察である。ミルの幼少時の家庭環境とジェームズ・ミル（*James Mill, 1773-1836*, 以下、ジェームズあるいは父、または父ミルという）による英才教育がミルの思想的源泉をなしているとともに、それによって、ミルの父への精神的依存が体質的に強められていったのを見る。ミルが20歳の時に陥った「精神の危機」以降、ミルが父やベンサム（*Jeremy Bentham, 1748-1832*）の思想とは異質の思想を吸収しながら自らの思想を築いたミルの思想形成を追う。本章第10節は、ミルの社会主義論の解釈に関係するミルとハリエットとの関係を探る。第2章はミルの「所有と制度」の問題関心に基づいて、ミルが18歳の時のオウエン主義者との討論から、遺稿「社会主義論集」（*CW V*、以下「遺稿」という）までのミルの社会主義論の形成を概観する。ミルがオウエン主義者ウィリアム・トンプソン（*William Thompson, 1775-1833*）から受けた刺激とサン・シモン主義者との交流、そして「労働の主張」（1845, *CWIV*）にはじまり、「1848年フランス二月革命の擁護」（1849, *CWX X*、以下「二月革命の擁護」という）、「ニューマン経済学」（1851,

CWV) を経て『経済学原理』(第3版、1852) に至るミルの社会主義論の形成を概観すると、『経済学原理』第2編「所有論」については「遺稿」との一貫性がみられるのに対し、第4編「将来の見通し」の章には初期から「遺稿」に至るミルの思想とは隔たりのある主張がみられるのである。ミルの思想の一貫性とは、ミルが既存の体制を批判するトンプソンをはじめとする社会主義者の主張に共感を覚えながら、体制の問題を多面的にそして経験主義的に捉え、倫理と科学の調和を図ろうとする思想にミル独自の社会主義論の主張を見出せることである。第3章は「将来の見通し」の章に、ミルの比較体制論とは違うハリエットの思想が混在しているために、ミルの社会主義論をめぐる研究者の見解が対立していることを述べ、矛盾する二人の思想を整理して解釈する必要性を述べる。第4章は『論理学体系』(1843, CWVII, VIII, 以下『論理学』という) におけるミルの方法論から『経済学原理』第3版の改訂を読む。ミルの社会主義論の方法である実践の論理(アートと科学)と比較体制論に従えば、「所有論」についてはミルの方法論から違和感なく読めるのに対し、「将来の見通し」の章(第3版)における労働者アソシエーション(生産協同組合)への体制移行の思想は、静態論(具体的演繹法)による科学的な論証が不足している。一方で「所有論」における体制論の結論が、ミルの思想的特質である功利主義、自由主義、経験主義の思想の調和がみられることが示される。第5章はミルの社会主義論の最終的な論考である「遺稿」を再読し、後世に影響を及ぼしているシュンペーターと近年までの研究者の所説を検討する。「遺稿」においては、人間の所有の観念が歴史的に可変性をもちながら、教育の難しさと私的所有にこだわる人間の保守性のために私有制が永続する両義性が述べられ、私有制と共産制を公平に扱いながら望ましい体制を探るミルの立場が示される。そして体制の問題は最大幸福原理を究極のアート(目的)として、人間の自由と自発性を規準に常に光があてられる問題であるというミルの主張をみる。第6章は、ミルの社会主義論に対するマルクスおよびマルクスが自分の名前を伏せて行ったとされるエッカリウスのミル批判を中心に検討する。マルクスのミル批判は、ミルの思想の核心を突く批判であるが、しかし経済理論の分野を別とするなら、それはマルクスの立場からみた批判であり、ミルの思想の内在的な批判ではないことを明らかにする。第7章はミルの思想からのマルクスのミル批判に対する反論の試みである。マルクスの批判に対するミルからの反論の試みは、ミルの思想的な特徴を浮き彫りにするのに役立つのである。以上のようにミルの思想形成と方法論を含めて多様性のあるミルの思想的特質から社会主義論を読み解くと、ミルを社会主義者としあるいは修正資本主義者として、彼の思想的立場を決めて解釈することは適切ではないことが理解される。それと同時に、ミルの著述からだけでなく、父やハリエットとの関係を含めた人間ミルと彼の思想との繋がりをみる思想の全体像からみると、ミルの著述からの理解がより明瞭になることがわかるのである。

第1章 若きミルの思想形成

ミルは世間一般にみられる穏やかで平和な家庭とは異なる環境で、父親による並外れた

英才教育をうけて育った。ミルの父ジェームズは個性が強く、激しい性格の持ち主で癡癡持ちであり、美貌で働き者だが知性の面で劣る母ハリエットを軽蔑していた。そのためにミルの両親は不仲であった。ミルは3歳の時より日中は父の書斎で過ごし、近所の子供と遊ぶことを許されず父の管理のもとで育った。若きミルは父の教育方針に従って思想形成がなされたばかりでなく、精神的に父に依存するように育ち、女性の評価を知的であるかどうかでみる父の女性観も自然と受け継いでいたようである。ミルは1830年に知性あふれる才女ハリエットと知り合い、彼女が既婚であるにもかかわらず恋の虜となる。二人と彼女の夫であるジョン・テイラー(John Taylor, 1796-1849)との三角関係は、ジョンが亡くなる1849年まで続く。ジョンの死から2年後に二人は結婚するが、ミルとハリエットの結婚生活はハリエットが亡くなる1858年11月までの7年半にすぎなかった。しかし彼女は病弱であったにも拘わらずミルの研究に献身的に尽くし、他方、ミルは彼女に精神的に依存した。ミルの伝記(*John Stuart Mill- the Man*) (1957)を書いたボーチャードは二人の恋は彼女に対するミルの精神的依存と従属関係をもたらしたと次のようにいう。

初恋のミルは、愛がすべてを変える道を経験したことがなかった。ハリエットが興味のあるものは何でも、魔法の杖として彼の喜びとなった(Borchard 1957, 47)。ハリエットに従うことがミルの生きるために必要となった。これはまさにミルとハリエットとの関係のすべてを言い表している(Ibid. 55)。

またミルの親友であり、『J.S.ミル評伝』(1882)や『ジェームズ・ミル伝』(1882)を書いたベイン(Alexander Bain, 1818-1903)は、ミルが『自伝』で彼女を才女としてほめそやすのはこの従属関係の帰結として、ミルのハリエットに関する叙述は信憑性を失ったと次のようにいう。

われわれはミルが率直に公言し誇りとしたような他人の意志への従属関係を正常な関係として受け取ることはできない。それは彼の妻の人格的資質に関する彼の異常な幻想(his extraordinary hallucination)の自然の成り行きにほかならないのである(Bain 1882, 171/ 203 頁)。

このようにミルの伝記の研究者がいうミルの妻に対する従属関係は、後にみるように、彼女の助力によるミルの著作活動に異常で不可解な現象を生じることになる。

3歳から成人するまでのミルに対する父の教育は、ジェームズとベンサムとの協議により、功利主義に基づく社会改革の闘士を育成するという意図のもとに、ジェームズの教育思想に従って行われた。ベンサムはイギリス経験論の伝統とフランス啓蒙思想の影響のもとに、功利主義の立場から自然法思想を批判し、社会を経験科学の対象として最大幸福原理から法と政治の改革を図った。父ミルは経験論の流れをくむハートリ(David Hartley, 1705-57)の観念連合説とフランス啓蒙期の唯物論哲学者エルヴェシウス(Claude A. Helvétius, 1715-71)の教育思想を受容し、教育に無限の信頼を置く思想に基づいてミルを教育した。ミルは父の教育に従い、制度改革に教育を重視する思想と経験論による観念連合説を継承する。ミルの社会主義論の背景には、先ず父から薫陶を受けたギリシャ哲学の徳を基礎と

して人類の最大幸福を目指して知的道徳的に人びとの人間性を高める教育を重視する思想があったのである。

ミルは1820年に1年余りフランスに遊学する。フランスでは南フランスにいたベンサムの弟サミュエル・ベンサムの世話になったのであるが、旅の途中にパリでは自由主義経済学者セー(Jean B. Say, 1767-1832)の家にはばらく滞在した。ミルは『自伝』で、セー宅で多くの自由主義者と交流したことを述べ、その文脈でフランス遊学の第一の成果は大陸の自由主義に対する「強く永続的な関心」を抱いたことであると述べる(CWI 63/97頁)。ミルは父より自由主義の教育をうけ自由主義思想を受容したが、フランス遊学によって自由の問題をイギリス国内の問題として考える垣根を取り払って、自由主義を「普遍的な(universal)」思想として捉えるようになったという(Ibid./同上)。ミルはフランスから帰国後、功利の原理により人類の現状を変革する決意を固める。功利主義者ミルの誕生である。そしてミルは父が指導する「哲学的急進派(The Philosophic Radicals)」の主演として活躍する。彼らの信条である哲学的急進主義は名誉革命以来のイギリスの貴族や大地主の支配する統治の体制を旧体制として急進的に変革し、功利主義の哲学的実践を図る思想である。それは功利主義に基づくベンサムの社会改革の思想と古典派経済学、ハートリの哲学、マルサスの人口原理により、民主主義を徹底し、代議政治と言論の自由を通じて私有財産制度と立憲君主制度の枠内で、トーリとウィグの党派の枠を越えて急進的に議会改革を図り、政治的経済的自由を目指す運動である。

しかしミルが1826年の秋に経験した精神の危機はミルに精神と思想の転機をもたらした。ミルが数か月悩んだ後に悟ったことは、人間の感情(feelings)の働きの重要性とともに、精神の内的陶冶が人間に幸福をもたらすという幸福感であり、それを契機としてミルはこの危機を脱する。人生には知性ととともに感情が重要であることに気付いたことによって、ミルは知性を重視して人間の思考と行為のすべてを観念連合の原理によって分析する父の思想の欠陥を認める。それ以降、ミルは父の政治論や代議制民主主義を絶対的な原理とみなさなくなり、父の指導原理であるベンサム主義に疑問を抱く。そして、それはミルの生活と精神活動のすべてを管理し指導する父ミルへの精神的な反発でもあった。

ミルは父の精神的呪縛から解放され、ベンサム主義とは異質の新しい思想に関心をよせる。父とベンサムを除いて、若きミルの思想形成に刺激を与え影響を及ぼした思想家のうち社会主義論に関係するのは、ロマン主義ではワーズワスとコウルリッジ、民主主義論ではトクヴィル、方法論ではコント、社会主義論ではウィリアム・トンブソンとサン・シモン派であると思われる。ミルは父に精神的に反発し、父やベンサムの思想の欠陥を認めたとはいえ、彼らの思想を放棄したわけではない。ミルは新旧の思想の対立を18世紀と19世紀の闘いとして捉えその和解を図るべく、功利主義に対してロマン主義、自由主義に対して社会主義が調和する可能性を探った。ミルは18世紀の思想を新しい思想で置き換えるのではなく、新しい思想を半面の真理として受容したのであった。

ミルは精神の危機の後、人間を快樂と苦痛を感じる存在として捉え社会が私利を追求す

る諸個人の集合体であるというベンサム主義に疑問を感じるようになる。ミルは 1820 年代の後半から 30 年代にかけてワーズワスの詩、コウルリッジの思想などロマン主義に親しみ、カーライルとの交流を深めて、感情の陶冶と人間の自由の観点からベンサム主義に修正を加える。精神の内的陶冶に人間の幸福をみる若きミルは、父ミルから継承した功利主義を柱にギリシャ哲学の素養と観念連合説の経験主義に加えて、人間の自由意志を重視するロマン主義的な倫理的自由主義の調和を図る。ミルが社会主義論でよりよき体制を選択する鍵を「人間の自由と自発性を最大限に発揮する」ことができる制度かどうかを判断の規準とする思想の源泉は、精神の危機を契機として必然論との調和を図ったこの自由主義（*CW* VIII 836-843 'Of Liberty and Necessity' (6) 9-23 頁)にあるとみられるのである。ミルはトクヴィルから民主主義に潜む多数の専制の危険、フランスの中央集権に対するアメリカの地方自治の重要性を教えられた。また方法論では、ミルはベンサムから方法論的個人主義、コントから社会静学と社会動学の区別、および逆の演繹法を継承した。そして社会主義論では、トンプソンから小規模で民主的かつ自発的な相互協働のアソシエーションを学び、サン・シモン派から動的な歴史観と私有財産の歴史性についての刺激を受けた。このようにミルの社会主義論は、功利主義、自由主義そして経験主義を軸として上記の思想が融和することによって、多様に富むミルの思想が展開されるのである。

第2章 ミルの社会主義論の形成

ミルが所有と制度に関して抱いた問題関心に基づく研究を辿り、18歳の時のオウエン主義者との討論から「遺稿」に至るまでの社会主義論の形成を概観する。ミルの社会主義論の形成に与えた影響が、『自伝』でミルがいうようにハリエットとサン・シモン派によるというだけでなく、ウィリアム・トンプソンの刺激が大きかったことが判明したことは本研究の収穫の一つであった。ミルは既存の体制を批判する社会主義者の主張に共感を覚えながら、体制論に倫理と科学の調和を図るミルの思想から独自の社会主義論を展開する多様性が示される。

ミルの社会主義論は、『経済学原理』の「所有論」と「将来の見通し」の章、および「遺稿」の三論文において展開され、研究者の議論もこれらの論文を中心にされる。しかしながら、ミルは、所有と制度に対する関心を青年時代から晩年に至るまで生涯を通じて抱いていた。従ってミルの体制に関する叙述は上の三論文に限られたものではなく、それ以外の論文でミルの主張が述べられている。しかも、文脈によって力点の置き方に違いがあるものの、ミルの主張には一貫性がみられるのである。

それは若きミルのオウエン主義批判において萌芽的に示された思想が、『経済学原理』を経て「遺稿」に至るまで保持されて、最初に提示された論点が変わらずに考察がすすめられている。ミルのオウエン主義批判の論点とは①分配の完全な平等は生産力の全開を妨げる。もし協同の制度で競争によってもたらされる貧富の差がなくなれば、労働者の勤労意欲と経営者の経営改善の意欲は失われるであろう。②オウエン主義者は競争の意義を誤解

しているが、競争原理は正しく評価すべきである。③協同の制度（共産主義）は過剰管理の危険性があり、人間性にとって大切な人間の行動の完全な自由を保障しているわけではない。④人口原理は協同体制になれば解決されるというものではなく、人類が体制の問題を超えて取り組むべき課題である。⑤協同の制度は多額の資金が必要であるが、その多額の資金は、教育投資にまわす方が制度改革には効果的である。以上のように、ミルはオウエン主義者との議論の応酬の中で、分配の完全な平等のもたらす問題、競争原理と勤労意欲、協同の制度（共産主義）における過剰管理と人間の自由が失われる危険、人口問題、制度改革における教育の役割という 5つの問題を提起している。ミルのこのオウエン主義者との討論は、ミルが哲学的急進派を代表して、競争と私有財産を否定するオウエン主義を批判する立場からなされたものであった。オウエン主義の代表は、ウィリアム・トンプソンであり、ミルは彼の労働全収権思想、人間性の把握や分配的正義の考え方を批判する。しかしミルが彼との論争で学んだことは、論敵であるはずのトンプソンが、実はミルと目的を同じくして、人類の最大幸福という功利の原理を導きの糸として分配的正義を実現すべく制度改革を図っていることであった。ミルはオウエン主義に刺激をうけ、競争の制度（私有財産制）と協同の制度（共産主義）とのいずれが人間性を高め、人類を幸福に導く制度であるのか、制度比較の思想をもってサン・シモン派との交流を始める。ミルの社会主義論の揺籃期の論点がその後の研究の課題となってミルは思索を深めることになったのである。

ミルが初めて労働問題について述べた「労働の主張」（1845）はミルの社会主義論の出発点である。この論文は、博愛主義者アーサー・ヘルプス（Arthur Helps, 1813-75）の同名の著書を書評する形での批判である。この論文におけるミルの主張は、労働者の自立を促す精神的改革と労資の対立を解消する制度改革の両面から労働問題の解決を図るものである。ミルは雇用者側の労働者に対する同情心を喚起することによって問題の解決を図るヘルプスの父権主義的従属保護の理論を批判して、労働者自身の自覚と精神の陶冶を促す教育の役割を強調する。労働者の精神的改革によって労働者自身が問題解決の主役であることを自覚し、労働者は知性と徳性を高め、暴力を用いることなしに世論による民主的な社会改革がなされなければならない。そしてミルは労働者の精神的改革と並んで、労働者の勤労の権利と資本家の所有の権利を調和する実践的な解決の方法は、「協同の働き」であるとして、アソシエーション（協同社会）の実験を繰り返し行うことを可能にする法制度の改革を提案する。「労働の主張」におけるミルのアソシエーションは、労働者が少額の資金を出し合って「パートナーシップないし株式会社」の形態で労働者が雇用者になる試みである。ミルはこのアソシエーションの実例として、のちに「将来の見通し」の章で検討されるフランスのルクレールの実験をあげる。ミルのここでのアソシエーションは、資本と労働のアソシエーションではあるが、小規模で民主的で、労働者が労働の自立性を取り戻す実験であり、ミルのこの思想はまさにトンプソンのアソシエーションの構想に近い。しかしミルは「労働の主張」では農業における自作農の利点と労働者アソシエーションにおける土

地の共同所有による農業の比較検討を示唆している。このように、ミルが制度比較の実験を主張するところに、ミルの社会主義論における科学性と比較体制論の思想を読み取ることができる。この比較体制論の方法は「所有論」へと連なり、またアソシエーションの検討は「将来の見通し」の章へと、そして暴力を避け世論による民主的な社会改革を目指すのは「遺稿」へと連なる思想である。そしてミルが「労働の主張」で述べた精神(倫理)と制度(科学)の両面からの改革でなければ効果が期待できないという思想はミルの社会主義論全体を貫く主張なのである。

1848年フランス二月革命はミルとハリエットに衝撃を与えた。『ハリエット著作集』を編集したジェイコブズによればハリエットは二月革命に刺激されて、革命の後に彼女の独自の革命の思想をもったという (Jacobs 1998, xv)。ミルは彼女ほど過激な反応は示さなかったといえ、労働運動が社会に及ぼす影響は今後ますます大きくなると判断し、『経済学原理』初版を出版した翌年、1849年に社会主義論を執筆する意図をもつに至った。そして『経済学原理』第2版(1849)を第3版(1852)へと改訂した。しかしこの第3版の改訂の結果をみると、「将来の見通し」の章では著しい変化がみられる一方、「所有論」ではミルが『自伝』や第3版の序文で述べているような大きな改訂はなく、その内容に原理的に変化があるわけではないのである。ミルの第3版改訂の意図は、当時のミルの三通の書簡(1848年 John Jay 宛 CWX III 740,741、1852年 Dr. Adolf Soetbeer 宛 CWX IV 85、1852年 Karl D.H.Rau 宛 Ibid.86,87)および初版と第3版の間に執筆された二本の論文、すなわち「1848年フランス二月革命の擁護」(1849、以下「二月革命の擁護」という)と「ニューマン経済学」から知ることができる。ミルの書簡によれば、ミルが『経済学原理』初版の書評からミルが社会主義に対して反対しているかのような誤解が生じているために、ミルはその誤解を解く必要を感じたために改訂したという (CWX III 740,741, Hollander 1985, vol.2, 790)。ミルは「労働の主張」に示されるように、社会主義に強い関心を抱いていたといえ、体制の問題は異なる体制の比較をしながら、あくまでも公平に実験によって科学的に検討すべきであると考えていた。従って、初版におけるミルの社会主義を批判する叙述が、ミルが社会主義に反対しているような印象を与えているならば、それはミルの真意が誤解されていることになる。ミルが「労働の主張」を著したその3年後に、フランスで人民が選んだ共和制政府によって「労働者アソシエーション」の実験が実際に行われたことは、経験主義者であるミルにとって画期的なことであった。ミルは「二月革命の擁護」を著し社会主義運動の歴史的意義を正しく評価することを主張する。ミルは社会主義の掲げる「分配的正義」「労働の尊厳」「勤労の組織化」という目標を二次的アートとして経済体制の問題を科学的に探究することを示す一方で、社会主義者とは距離を置き、彼らの現体制批判に学びながら彼らの目的と努力を利用することに改革の意義を見出すという政治的立場を表明する。そして「ニューマン経済学」ではニューマンの体制認識の甘さを批判して、功利の原理をアートとして分配的正義を図るべく、倫理と科学の両面から体制の問題を探究しようという経済思想の立場を表明する。ミルは第3版を改訂した理由について、二月革命という歴

史的な事件を転機として、「歴史の変化がみられる(CWI 241/334 頁)」ので、「アソシエーションを第一歩とする社会的変化の傾向を、より明確に指摘しようとしてつとめた」という。ミルにとって二月革命後の歴史的变化とは、私有制を自明の体制とせず、体制の問題を社会改革の課題として認め、改革のための運動が各国でみられるようになったことである。ミルはこの歴史的变化を意識して改訂した『経済学原理』第3版の序文で社会改革の目的を次のように述べる。

社会改革の真の目的は、最大の個人的自由と分配的正義を兼ね備えた状態に適するよう人類を教育することである。社会制度は人びとの精神的道徳的な陶冶がそのような状態に達したときに、修正された私有財産制度と生産手段の共有と分配を管理する制度を比較して、いずれが人間を幸福にして人間性を高める制度であるのか、当時の人びとに選択をまかせる問題である(CW II xciii/(1)27 頁) から、『経済学原理』でこのような社会改革につながる歴史の変化を人びとに知らせる必要があったのである

この第3版の序文でミルは、人間を幸福にして人間性を高める制度を、修正された私有制と分配を管理して生産手段を共有する制度のいずれがよいのかを問うのが社会改革の課題であると述べている。これは「所有論」や「遺稿」における社会主義論でのミルの主張を端的に示すものとしてみられるのである。以上のようなミルの意図に基づく構想の理論的展開は、『経済学原理』「所有論」と「将来の見通し」の二つの章、および「遺稿」においてなされる。

「所有論」は静態論の分野に属し、所有とさまざまな制度の比較、および異なった制度における人間性の変化と法則を探る比較体制論である。「所有論」では、先ず「私有か共有か」というプラトンとアリストテレスが提起した所有制度の問題は、歴史的必然ではなく人びとの「選択の問題」とされる(CWII 201/(2)17 頁)。次にミルは共産主義に対する反対論を検討し、共産主義への制度変化による労働者の勤労意欲、共産制が人口増におよぼす影響、共産制における労働配分の困難性、異なる制度における人間の自由と自発性の問題の四つの論点に焦点をあてる。そしてミルの主張は、私有制と共産制、あるいはその中間に属する制度のいずれが人間の自由と自発性の最大量を許すかを経験的に比較する問題であるとされ、その結論は未決となる。この制度比較は人々の知的道徳的水準が高まり、私有制の欠陥が是正されて、私有制と共産制の最善の状態と比較されなければならないとされる(Ibid.208,209/(2)30,31 頁)。ミルはこの後、分配的正義をめざすにあたり、分配の完全な平等を唱える共産主義に対する反対論に考慮して工夫された社会主義を「哲学的社会主義」として、サン・シモン主義とフーリエ主義の検討を行う。ミルはサン・シモン主義が労働配分や労働の成果に対して配慮している点を評価するが、しかしその運営が民主的でなく、指導者の専制的な管理がなされる点を批判する。ミルは「所有論」ではフーリエ主義を高く評価する。フーリエ主義は私的所有や相続を排除せず、分配的正義に対して多面的に考慮し、労働の尊厳を重視して人間性の法則に逆らわない社会主義としている。しかしミルはフーリエ主義に全面的に賛成するわけではなく、フーリエ主義が制度改革に熱心なあま

り「道德教育を全く忘れ(*CW XIV22*)」、そしてそのファランジュという機構が「扱いにくい性格(*CWII 984/ (2)42 頁*)」を有していると指摘している。ミルはフーリエ主義の検討の結論的な文脈で、体制の問題は経験をもとにして決める選択の問題であるから、フーリエ主義をはじめとするさまざまなアソシエーションに勤労の組織化の実験の機会が与えられることがのぞましいと述べる(*Ibid.214/ (2)41 頁*)。体制の選択はイデオロギーではなく、経験によって判断すべきであるというミルの経験主義の表明である。ミルの「所有論」における主張は、以上のように、体制の問題を未解決とし、人間の自由と自発性を最大限に許す制度を目指して実験や経験によって科学的に判断しそれを選択するものとし、体制を選択し体制の変化に適応する人間の資質を高めるために教育を重視するという、倫理と科学の調和する改革案であったのである。

他方、「将来の見通し」の章におけるミルの主張はこれとは異なる。「将来の見通し」の章は人間および社会の進歩性を明らかにする動態論である。そこでは利潤率低下論と定常状態論に続いて私有財産制度からパートナーシップを経て労働者アソシエーションへと変わる体制移行が予測される。人間および社会の進歩による経済体制の変化の探究が動態論の課題であるとしても、「将来の見通し」の章には社会主義論におけるミルの一貫した主張と矛盾する将来の体制を予測する思想が混入しているために問題が生じるのである。

『経済学原理』第4編第4,5章でミルは、リカードを継承して利潤率の傾向的低落論を展開する。市場競争と私有制を基礎とする経済(資本主義経済)が発展する過程において、企業の利潤率が競争の帰結として最低の水準に向かう傾向があることと、その傾向に反作用してその傾向を阻止する要因(商業上の投機、生産技術の改良、廉価品の輸入、海外への資本輸出など)について検討される。そして市場におけるこれらの作用と反作用が働く結果、利潤率の傾向的低落の競争的要因が反対要因を凌駕することによって資本の増加が停止し、止まることなく発展し成熟した資本主義経済は定常状態(**the stationary state**)に陥るというのである(*CW III 738/ (4)73,74 頁*)。ミルは続く第6章(定常状態論)で人間性を完成に導く理想社会を描くことによって体制論の理想を示している。ミルはトクヴィルからの情報を参考としてアメリカの経済社会を資本主義の典型とみなし、経済成長主義に基づく過度の競争社会を批判する。ミルによれば、資本主義経済は利潤率低下の法則とマルサスの人口法則が作用することによって、競争の行き着く最後には、資本と人口の定常状態を迎えることになる。人類が経済的に利用可能な地球上の資源は有限であるから、富と人口は無限に増大するわけにはいかない。しかし経済的定常状態は人類の人的進歩の停止を意味するのではないから悲観するには及ばない。ミルは、スミスをはじめとする経済学者が唱える経済成長主義を改め、分配的正義と人口増の適度な制限を図り、教育と地球環境に配慮する経済運営を行うことによって、人類は定常状態と両立する制度において人的進歩を図る方向を目指すべきであるという。ミルが定常状態と両立すると考える理想的な経済社会は、人びとが富の獲得に専念することなく、人間本性(**human nature**)を高めるのに努力する社会である。それはミルが『論理学』第6編の最終章で述べる「生き方のア

ート (the Art of Living, CWIII 756/ (4)109 頁, CWIII 949/ (6)207,208 頁)」を豊かにすることを意味すると思われる。ミルはワーズワスが大自然の中で詩を読み哲学を考えるように、人間が大自然の中で孤独になり、精神の内的陶冶によって思索を深め人格を高めることの重要性を強調する。

このような理想社会を示した後で、ミルは第 7 章でアソシエーション論を展開する。「将来の見通し」の章は 7 つの節から構成されるが、ここでのミルの主張を大括りすると、第 1-3 節、第 4-6 節、第 7 節の三つの異なった論点に分かれる。このうち第 7 節はミルの持論である競争原理の意義についての議論であり、社会主義体制においても競争が有用で不可欠であることが述べられる。そして第 1-3 節は、ほぼ「労働の主張」の思想を継承するミルの主張が述べられている (Robbins 1966, x x vi, 山下 1999/ 12, (2)90 頁)。それはミルの自由で自発的な労働観により父権主義的な従属保護の理論を批判し、労働者の自立による労働問題の解決、労働者自身の精神的陶冶の重要性、労働者の成長が人口と女性問題に与える好ましい影響など従来からのミルの思想が述べられる。しかし問題はアソシエーション論が展開される第 4-6 節において生じる。ベインは「将来に見通し」の章を「全面的にハリエットの作品である (Bain 1882, 168/ 201 頁) と述べ、またロビンズは「将来の見通し」の章の中でも第 4-6 節には、「労働の主張」や「所有論」にはない「まさに非常に重要なくだり」が記述されている (Robbins 1978, 159/ 138 頁) と述べる。第 4-6 節の何が重要であるかという点、「所有論」で一定の評価をうけたフリーエ主義に対する言及は全くなされずに、第 3 版で初めて導入された私有制から労働者アソシエーションへの体制移行が予測されていることである。「所有論」で選択の問題とされた体制の問題は、「将来の見通し」の章では、必然的な体制移行の問題に変化している。この体制移行の予測は、問題を未決のままにしておくことを認めないコントの思想を批判するミルの主張や、歴史の多様性をみずに協同の原理という一つの原理によって歴史が段階的に移行するというサン・シモン主義を批判するミルの主張とは矛盾するのである。それはベインが指摘するように、ミルの思想とは異質なハリエットの思想が混入したことの帰結としてみられるのである (Bain, 168,169/ 201 頁)。第 3 版が改訂された 1852 年当時、ミルとハリエットは改訂のための共同作業をしていた。だが「将来の見通し」の章のアソシエーション論は主としてハリエットの作品である (CW255/ 343 頁)。たといミルが彼女との議論の過程で、フランスのピアノ製造のアソシエーションのなど個人の自由と集合的生産が両立している労働者アソシエーションの例を二人で賞賛していることがあった (Jacobs 2002, 211) としても、科学者ミルの思想の多様性からみて、ミルがこの事実から短絡的に経済社会全体の体制変革を予測するに至ったとは考えにくいのである。

ミルの社会主義論の最終的な思想は「遺稿」(1879)において示された。「遺稿」は、ミルの死後、ヘレン・テイラー (Helen Taylor, 1831-1907, ハリエットと前夫との間に生まれた娘、以下ヘレンという) が『フォトナイトリ・レビュー』に掲載したミルの社会主義論に関する 5 本の論文集である。ヘレンは「遺稿」の序文で、ミルが「遺稿」を書く決意を

したのが 1869 年のことであったという。「遺稿」は社会主義が世の中でますます大きな問題になるとミルが判断し、これを徹底的にかつ公平に考察しようとして書かれた最初の草稿なのであった。だがミルが社会主義に関する独立の著作をまとめる意図をもったのは、それより 20 年前の 1849 年である(『経済学原理』第 2 版の序文)。ミルはそれから「遺稿」を書くまでの間、社会主義論の構想を温めていたものと推測され、「遺稿」は草稿にしては体系的なまとまりをみせている。ロビンズは「遺稿」が「ミルの最終的な立場と評価(Robbins 1978, 161/ 140 頁)」する。ミルの社会主義論の形成を辿り、その全体の流れをみると、所有と制度の問題を公平に根本から探ろうという長年の意図が「遺稿」においてまとめられており、「遺稿」を最終的な立場とするロビンズの評価に賛成できるのである。

ミルが「遺稿」を実際に書くことと決意した契機となった事件は、国際労働者協会(第 1 インターナショナル)の結成である。ミルは革命的な体制変革を目指す大陸の社会主義者の動向に関する情報をえて、過激な手段による制度改革と、その制度改革の後に予想される一部の指導者による中央集権的な統治を懸念して、それは人間の自由への脅威を増すと感じたようである。ミルは第 1 章で社会主義論の課題を述べる。それは「所有論」第 2 節で述べられた体制比較による所有と制度に関する根本的な思索である。ミルは社会主義論の方法を、私的所有の理論と社会主義の理論という二つの対立する理論を、いかなる偏見もなしに公平に比較し根本的に考察する方法であるという。ミルの社会主義論は、このように私有制から共産主義を射程とする幅広い性格を有するとともに、可能な限りさまざまな制度を実験の対象とする経験主義的な比較体制論の思想を含意するものと解釈されるのである(CWV 711/ 397 頁)。ミルは第 2 章で、社会主義者の掲げる指導原理である分配的正義、労働の尊厳、勤労の組織化の観点から、ルイ・ブラン、コンシデラン、オウエンの現体制批判を引用して、現在の私的所有に基づく富の生産と分配の制度の帰結である害悪を列挙する(Ibid. 711-727/ 398-414 頁)。第 3 章でミルは社会主義者の経済学的誤謬を正し、社会主義者の指導原理と彼らの体制批判に学びながらも、体制の問題は人間の知的道徳的水準に依存するので、実験台上の試練により社会主義制度の実現可能性と現在の経済制度の最良の改善の可能性を探るべきであるという「所有論」と同様のミルの経験主義的な主張が述べられる(Ibid. 727-736/ 414-424 頁)。第 4 章はミルの社会主義論における思想的立場の表明と社会主義論の結論が述べられる。ミルは先ず第 1 インターナショナルの動きを念頭に中央集権的な革命的な社会主義を批判する。ミルによれば、革命的な社会主義は一撃にして体制移行を図り、現体制の幸福の量と改善の可能性を放棄するという過激な社会改革の方法をとり、いろいろな体制を実験によって試し合理的に体制を選択するという科学性が欠如しているから、「遺稿」における検討の対象から除外される(Ibid. 737, 738/ 424, 425 頁)。ミルの社会主義論はいかなる経済体制が人類の最大幸福を導くのかを、実験によって科学的に探究するものであり、ミルがここで私有制と対置するのは、トンプソン型アソシエーションやフーリエ主義のファランジュなどをはじめとする小規模で比較的に実験の容易な社会主義である。それは消費財の私的所有を排除せず生産手段の共有を工夫する「思慮深

く哲学的な社会主義」である。ミルはこの社会主義を「単純な共産主義」としてモデル化して私有制と対比し、労働者と経営者の勤労意欲の変化を比較検討する。それは「所有論」で未解決とされた問題の再検討なのであるが、ミルは共産主義の場合、勤労意欲の問題を含めてさまざまな分野で「社会のすべての人間に対する知性と道徳性の高い教育水準を要求するから」、もし実験なしに共産主義社会に強制される政治的革命が起こったとしてもそれは失敗に終わるといふ (Ibid.746/ 433,434 頁)。そして、ミルは社会主義論の結論を次のように述べる。

競争と私的所有の制度と共産主義の制度のうち、「問題はどちらが人間の幸福を最もよく導きだすか? (Ibid.738/ 425 頁)」を指導原理として、「中央集権的でなく (Ibid.738/ 426 頁)」「民主的で (Ibid.745/ 432 頁)」、労働を魅力的にするとともに分配的正義を図る制度を、実験によって漸進的に探ることである (Ibid.746,747/ 434 頁)。そして、人類は思考と実践の双方において、さまざまな方向に自発的に発展する自由をもつべきである。共産制において、個人が公権力の支配のもとで、多数者による個性への圧迫が強くなる可能性がある一方で、将来、人類の欲望と環境に最も適した社会制度になる可能性があることも否定できない。このように考えると、所有制度の問題は、結局、有利な事情における共産主義的原理の試練と、現在の私有制の次第に実現されるであろう改善とのいずれが人類の最大幸福を目指すのに適した制度なのか、新しい光がたえずあてられる未解決の問題であり、また長くそうであろうと私には思われる (Ibid.746/ 433 頁)。

ミルの第4章における結論は、体制選択の鍵を人間の自由と自発性を規準として両制度ともに最善の状態において比較し、その結論を未解決の問題とする「所有論」における結論と原理的には同じである。それは同時に、功利主義、自由主義、経験主義というミルの思想的特質の表現であるとみられるのである。

第5章でミルは、第4章で述べられた結論の論拠を述べる。それは私有制の永続性と所有の観念と所有制度の可変性という矛盾が両立する議論である。ミルは自由主義者であり、人間や社会の矛盾とその矛盾の解決への努力を発展の原動力として考え、次のようにいう。

私的所有および競争の制度は、人間が生存と安全を保障する唯一のよりどころを失うまいとする明白な理由から長期間にわたって存続する。たとえ、どこかの国で大衆運動が革命政府の指導者に社会主義者を選出し共産主義が実現したとしても、私有財産制度はいずれ復活するのである (Ibid.749,750/ 437,438 頁)。しかしながら、所有の観念と所有制度は歴史的に可変である。所有権に関するさまざまな見解を先入観をもつてみるべきでない。共産主義の究極の可能性を含めて、社会主義者の現体制批判に耳を傾け、公共の利益に反する特定の利益を排除し、分配的正義を目指す社会改革に役立てるべきである (Ibid.753/ 441 頁)。

以上のように、ミルは「遺稿」において私有制の永続性と所有制度の可変性、および体制の問題が未解決であり続けることをいい、「所有論」と同じく人類の最大幸福を目指して科学的に探究する比較体制論を主張するのである。

第3章 ミルの社会主義論とハリエット・テイラー

ミルの社会主義論について研究者の見解が分かれるのは、主として「所有論」、「将来の見通し」の章、および「遺稿」との関係と評価をいかにみるかである。対立する中で研究者の多様な解釈、そしてミルの方法論を含めた思想的特質からの評価については第4、5章で検討されるが、その前に本章では、ミルの解釈を複雑にしている原因の一つでありその原因の背景にあるミルとハリエットの思想の異質性と、ミルと異なる思想をミルの思想として読むことには問題が大きいことが指摘される。それはミルの文献を読むだけでは見落とされる論点である。資料の制約があるとはいえ、ミルの書簡や伝記の研究からみた人間としてのミル、そしてミルの思想の全体像を視野にいたした説明を試みるのが重要とされる。ミルとハリエットの思想の異質性について、ミルは『自伝』で次のように言う。

『経済学原理』における「抽象的で理論的な部分はミル固有のもの」であるのに対し、ハリエットは「哲学を人間の社会の進歩の必要に応用するにあたり、思索の大胆さと実際の判断の用心深さ」をもって「新しい秩序の到来を予測する」「勇気と先見の明」をもっている(*CW* I 255-257/ 344,345 頁)。

このようにミルとハリエットの思想には異質性があるとミルは述べる。しかしミルが自分とは違う彼女の思想を受容したのかどうかについては、ハイエクがミル夫妻の往復書簡の多くを公表(Hayek 1951)してから、多くの研究者によって論争が行われた。この論争をふまえてロブソンは、『経済学原理』第3版で改訂された「将来の見通し」の章は、彼女の改訂の要請をミルが受け入れ、彼女の影響のもとに改訂されたという説は、ミル自身の言葉にもかかわらず説得力がないとみる。それはむしろ科学者ミルと改革者であるとともにアーティストであるハリエットとの分業の問題として捉えるべきであるという(Robson 1968, 60-68)。近年では、我が国で山下と矢島がこの問題を検討し、いずれもミルのハリエットからの理論的な影響を否定している。山下はミルがスティリンガーのいうように、「父からの早期教育の反動で、彼女のような感情や人間性をもつ性格にあこがれ、彼女に無意識に依存した」と述べている(山下 1999, (1)35 頁, 2000, (3)45-47 頁, 矢島 2001, 50 頁)。二人のこの思考の違いは 1848 年に起こったフランス二月革命に対する対応の仕方に表れる。ミルは二月革命の一年後に「二月革命の擁護」で革命に対する自らの立場を表明し、革命を擁護すると同時に、革命に対する疑問も述べて社会主義の動きにある一定の距離をおいている。これに対し、『ハリエット著作集』の著者ジェイコブズは、ハリエットが革命を機に社会主義に同情的になり彼女自身の革命の思想をもつに至ったという(Jacobs 1998, xv)。将来の見通しに大胆な彼女が革命の思想をもてば、ミルのように実験を重ねて社会制度を比較検討するのではなく、近い将来の体制変革を予測するに至ることは容易に考えられることである。

ミル自身は経済体制の将来を「予見できると想像するよううぬぼれをもっていなかった(*CWI* 239/ 332 頁)」といいながら、なかば断定的に将来を予測した「将来の見通し」の

章を『経済学原理』第3版に挿入した。ミルの思想形成の背景についての研究（ベイン、パック、ボーチャード、ジェイコブズ、キャパルディ）を参考にしてミルがなぜ彼女の異質な思想を受容したのかを考えると、ミルが幼い時から父との関係によってつくられたミルの精神的依存体質がこの論点の背景にあることは十分に考えられることである。ミルの社会主義論の研究において、このような論点が看過されるのは、ミルの真の主張をみる上で好ましくないことは明らかである。この点を考慮しつつ、ミルの思想形成や思想の全体像を視野において、ミルの思想を探ることにしよう。

第4章『論理学体系』の方法から『経済学原理』の社会主義論を読む

本章はミルの社会主義論を倫理と科学の調和する思想として、『論理学』で示された方法論である「実践の論理」（アートと科学）と比較体制論から『経済学原理』第3版（1852）の改訂の意味を検討する。その結論を先取りすると次の通りである。

ミルは「功利の原理（人間の幸福の増進）」を究極的原理とするアートの下に、社会主義者の主張する分配的正義、労働の尊厳、勤労の組織化という目標を二次的アートとして認める一方、体制選択の鍵を人間の自由と自発性を最大限に発揮する社会制度として、私有制の改善と広い語義におけるアソシエーションの実験を通して比較しながら実証的に探究することを社会科学の課題とした。ミルは『論理学』の方法と多様な主張の半面の真理の総合を図ることによって、私有制の改善と共産主義の理想の追求まで体制の選択肢を広げていると考えられる。このように読むと、ミルを社会主義者とみるのも、あるいはミルが社会主義を批判する議論に力点をおく解釈も、ともに、幅広く多面的なミルの思想的特質を偏りなく把握しているとは思われないのである。

ミルはベンサムからアートと科学の関係の考察を学び（Schofield 2006, 9-11）、ヒューエル、ハーシェル、コントの著作にヒントをえて（CWI 215-219/ 282-284 頁）、演繹法と帰納法の総合という難題の克服をめざした『論理学』の第6編（The Moral Sciences）で社会科学方法論を展開する。ベンサムは「アート（到達すべき目的、Art, an end to be attained, CWVIII 944/ (6)199 頁）」を「功利あるいは最大多数の最大幸福」として、アートと科学の相互に依存する関係を捉え、社会科学の課題がアートを目指す新しい科学の創出であると考える。ミルはベンサムの方法を評価し彼の個人主義的方法論を継承するが、その一方で、ベンサムの人間性の把握が狭すぎるとしてベンサムを批判する。そしてミルはロマン主義の倫理的自由とギリシャ哲学の徳の概念を融和させた方法論の自由主義的な修正を行った。ベンサムは人間を快楽と苦痛を感じる存在として捉え、人間の快苦を基礎とする功利を量的に把握できるものとして、人間の最大幸福を目指す目標を定めた。これに対しミルは、人間を快楽と苦痛を感じる人間として捉えるばかりでなく、功利の概念を質的に精神的に捉え、自由な精神をもつ人間の多様性を重視する。科学は自然の必然的な法則を究明するのに対して、アート（art）はなすべき当為を意味し、倫理や道徳はアートの領域に属する（CWVIII 943/ (6)196 頁）。ミルは人間の知的道徳的資質の開発による人間性の向上と、精神

の内的陶冶により利己的自我を制御し、個人の幸福と社会全体の幸福を調和させることが最大幸福への道であると考え（『功利主義論』CWX215,216/128-131頁）。ミルが『経済学原理』第3版への序文で、いかなる制度が人間の幸福に好都合であり、人間性を高めるのに寄与するのかを問うのは、ミルの社会主義論が功利主義とアートの思想に基づき、人間の幸福を増進させるためには、科学の力を借りて人間性を高める制度を目指していると理解される。

ミルはコントの方法を継承して社会静学＝具体的演繹法と社会動学＝逆の演繹法を社会科学に適用する。社会静学は、共存の斉一性(Uniformities of coexistence)の経験的法則を探るため、歴史的変化をできるだけ無視して、その安定化を確かめる「コンセンサス(交感)の理論(CWⅧ917,918/(6)151頁)」であり、その方法は「物理的もしくは具体的演繹法(the physical or concrete deductive method)」である。それは観察と実験による直接帰納、その原因がどのように作用するかの論証、論証された結果と他の経験的法則との比較による検証という三つの操作を経る(CWⅦ454-463/(3)302-312頁)。ミルが社会主義論で、アソシエーションの実験による経験的法則を重視し、異なる体制における人間性の変化とその比較により制度選択を行う比較体制論を主張するのは、ミルが具体的演繹法を採用しているからとみられる。一方、社会動学は歴史的事象の継起の法則を探究して、人間および社会の進歩性を明らかにするという社会科学の根本問題を扱う(CWⅧ912,913/(6)142,143頁)。社会静学と社会動学の関係は、静学が動学の経験的法則から導かれた派生的法則を探究する(Ibid.912/142頁)のに対し、動学は静学の分野である人間性の法則の不断の検証を必要とする(Ibid.917/(6)149,150頁)。社会動学の方法である「逆の演繹もしくは歴史的方法(the inverse deductive or historical method)」は、社会現象の異常な複雑さから具体的演繹法が適用不可能なため(Ibid.897/(6)116頁)、特定の経験から暫定的に概括的結論をえた後に、その結論が既知の人間性の法則から自然に導きだせるかどうかを確かめる方法である(CWⅠ219/284頁)。このように社会動学においては、複雑な社会現象における人間の特定の経験からえられた暫定的結論が科学性をもつためには、人間性の法則の不断の検証が必要なのであった。ミルは論理学を研究する過程で、人間性の法則の解明には、心理学をはじめとする諸科学のほかにエソロジー(Ethology, 性格形成の科学)とポリティカル・エソロジー(Political Ethology, 国民性の科学)の確立が必要と考えていた。ミルの論理学研究に協力したベイン(Alexander Bain, 1818-1903)は、ミルは『論理学』刊行後、エソロジー研究に着手すべく構想を練っていたが、構想はまとまらずに終わった。ミルはエソロジーの研究を断念したが、『論理学』の方法を経済学の方法に適用すべく『経済学原理』の執筆に向かったのだという(Bain 1882, 79/95-97頁)。エソロジーとポリティカル・エソロジーが構想倒れに終わったといえ、『経済学原理』には、社会静学の領域である「所有論」には、所有と競争、分配や労働と勤労意欲、制度と人間の自由の関係の解明を照準として異なる体制における人間性の変化の科学的な探究が試みられている。そしてミルの社会主義論の本来の意図によれば、「所有論(社会静学)」と「将来の見通し」の章(社会動学)

とは方法論的に調和がみられるはずであった。すなわち、「将来の見通し」の章では、逆の演繹法によって、フランスのアソシエーションの特定の経験から暫定的に歴史社会の進歩性を含意する経済法則を見出し、この動学の法則を経験的な具体的演繹法によって、人間性の法則に合致するかどうか検証がなされるべきであった。ところが実際に書かれた「将来の見通し」の章（第3版）は具体的演繹法による検証なしに、フランスにおけるピアノ製造工場の例などの労働者アソシエーションの成功例をもって、私有制から資本と労働のアソシエーション（パートナーシップ）を経て、最終的には労働者アソシエーションへの経済の体制変革が短絡的に予測されている。なるほど『経済学原理』第4編第4, 5章で展開された利潤率の傾向的低落の法則によって私有制（資本主義）が存続できなくなり、労働者アソシエーションへの体制移行をとげるといふ文脈は、この部分だけに光をあてれば理解されうる経済理論の演繹的な論理である。しかし、社会主義論は経済理論の分野に止まるものではなく、ミルにおいては社会科学全般の視点から考察されるべきものなのである（初版 *CW* III 758, 759/ (4) 120, 121 頁, 第2版 *Ibid.* 765/ 120, 121 頁, 弊著 201 頁）。ミルの歴史観と思想の全体からみると、ミルの主張は経済の論理を含めて、より広いところにある。ミルは一つの発展法則のみによって歴史が推移するとするコントの歴史観を批判した（*CWX* II 37）。そして階級闘争の歴史家としてマルクスの先駆者といわれるギゾー（F. P. G. Guizot, 1787-1874）の決定論的歴史観を批判した（Feuer 1976, 90, 91/ 171, 172 頁）。ミルは歴史の多様性を重視しており、しかも経済学の分野を超えて社会科学のすべての分野に関わる社会主義論において、一つの経済法則のみによって体制移行するとミルが主張していたとは考えにくい。今後いかなる社会制度がのぞましいのかを「予測できると考えるほど厚かましくはなかった（*CWI* 239/ 332 頁）」というミルが、社会静学による論証の試みのない体制の変革を大胆に予測しているとは思われない。「将来の見通し」の章は論証が不十分な予測が入りこんでいるために、ミルの方法論からみると不本意な章であり、この章を重視しすぎると、ミルの思想の理解を誤るのである。

これに対し「所有論」（第3版）の結論はミルの思想的特質が融和して含意されている。「所有論」の要旨は次の通りである。

社会哲学の問題として「所有論」を考察するとき、分配的正義を目指す経済体制の中でいかなる制度がすぐれているかという問題は、最善の状態においてどのような成績をあげるかを、比較して判断すべきである。この体制比較のためには、人びとの知的道徳的水準を向上させる教育の普及と、人口の適度な制限を条件とする。しかし、この比較のための正しい試験（*a fair trial*）がなされたことがなく、上の条件が充たされないばかりか関連する知識や経験が不足する現在の段階では、どの制度がすぐれているかを判断することができないのでその判定は未解決である。もし、その最終的な判定の決め手となる鍵をあえて推測するとすれば、何が人間の自由と自発性の最大量（*the greatest amount of human liberty and spontaneity*）を許すかという規準がそれである。自由を捨てて平等を要求する社会組織は、人間性のもっとも高尚な特性の一つを奪うもので

ある（*CW* II 207-209/ (2)28-31 頁）。

スコラプスキーによれば、ミルの哲学には功利主義、自由主義、人間存在に関する自然主義＝イギリス経験論哲学という三つの思想的源泉がある。これらの三つの思想的源泉はミルの思想体系の中で融和し、互いに独立しながら影響しあって、ミルの思想的特質を形成している（Skorupski 2006 (2), 45）。このスコラプスキーが捉えるミルの思想的特質を参考にして、「所有論」の結論を体制論における実践の論理の展開として読むと、これらの三つの思想の調和が認められるのである。先ずミルが体制選択の決め手となる鍵を、人間の自由と自発性を最大限に発揮することができる制度かどうかとしたのは、ミルの功利主義と自由主義の立場から体制論にミルの目的論の究極のアートである最大幸福原理を設定したことを意味する。ミルは功利主義者として、功利あるいは人類の最大幸福原理を目的論の究極的規準、または第1原理とする（『功利主義論』*CWX* 207/ 119 頁、『論理学』*CW* VIII 951/ (6)210,211 頁）。そしてミルは自由主義者として、人間および社会の「唯一の確実な永続的な改革の源泉は自由である（『自由論』*CWX* VIII 207/ 142 頁）」と考える。自由と功利の関係は、「個性の自由な発展が、幸福のもっとも本質的な要素の一つ（*Ibid.*261/ 115 頁）であることによって結びつくのである。この功利の要素である個性の自由な発展は、他者と社会に害を及ぼさない限りでの個人の自発性、ないし選択する人間の意志の自由を行使することによって促進される（*CWX* 261-264/ 116-122 頁）。ミルにおいては自由と幸福、および自由と自発性はこのような関係にある。繰り返すと、ミルはよりよき制度を求める体制論に、功利主義と自由主義が融和するものとして、功利を目指す究極のアートを設定した。それは幸福の要素である個性の自由な発展ないし人間の意志の自由を最大限に発揮することによって人間および社会の進歩を図る制度改革を意味するのである。

次にミルは体制比較のための正しい試験がなされたことがないので、特定の制度がのぞましいとは判断することが困難であるので問題を未解決とした。それはイギリス経験論を継承するミルの思想の科学性の表れであると思われる。ミルは人間と社会を科学の対象とし、観察と実験によって証明されなければ合理的な真理は見出されないと考える。そして経験主義者であるとともに自由主義者であるミルは、自由に個性がぶつかりあう矛盾の存在とその矛盾の解決への努力が人間と社会の進歩を促すと考える。矛盾の存在とその矛盾の解決への努力は人間と社会の進歩のために永遠に存続するとみられるから、矛盾が消滅する歴史の思想を抱いたヘーゲルやマルクスとは異なり、矛盾をはらむ社会の改革は果てしなく続くと考え（Skorupski 2006, (1)71, *CWX* 224/ 137 頁）。このように社会的矛盾の存在が社会の進歩の条件であるなら、人間が歴史的社会的進歩を望むのであれば、体制の選択はミルのいうように「新しい光が、絶えずあてられる未解決の問題（「遺稿」）であり続けることになる。

ミルの社会主義論における体制の比較は、イデオロギーを対決させる思弁的な議論ではない。私有制（資本主義）と共産主義という対極にある体制を射程において、社会哲学の応用として、実践の論理（アート）の科学的な展開である。人類の幸福の増進というアートの課題

をうけて、競争による市場原理を生かしつつ、私有制から生じる弊害を除去する改善と、広い語義におけるアソシエーションの実験を重ねながらその良否を経験的に判断する。経済法則を探究しつつも経済の領域に止まらず、社会科学全体に視座を広げて「時代と場所と環境（*CWI* 177/ 230 頁）」に適した制度を科学的に探る比較体制論の方法をとる。アート（倫理）と科学は相互依存の関係にあるから、よりよき制度の探究とともに、制度を選択する主体に対して人間性を高める教育は常になされなければならないのである。

第5章「遺稿」社会主義論の再検討

ミルの社会主義論の最終的な論考である「遺稿」を再検討し、シュンペーターをはじめとする研究者の所説を考察する。研究者の見解を二分するのは『経済学原理』第3版の改訂をいかにみるかである。第3版の改訂にミルの思想の変化があり、そこにミルの社会主義論の結論をみる研究者は「遺稿」に比較して「将来の見通し」の章を重視するから、「遺稿」の評価は当然低くなる。しかし「遺稿」は、既にみたように体系的なまとまりがあるばかりでなく、「ニューマン経済学」以前の初期の社会主義論と「所有論」におけるミルの主張と一貫性がある。「遺稿」は「ミルの最終的立場として評価（*Robbins* 1978, 161/ 140 頁）」する解釈には賛成である。「遺稿」が「所有論」と異なるのは過激な共産主義に対して好意的ではなく、革命的な社会主義が検討の対象から除かれ、オウエン主義、フーリエ主義、ルイ・ブランのアソシエーションを「単純な共産主義」としてモデル化して私有制と比較されて検討されていること、および「将来の見通し」の章と同じ領域に属する社会動学の視点から、私有制の永続性と所有の観念の変性という矛盾する思想が述べられ、この思想にもとづき私有制の改善と共産主義の理想の追求という幅広い体制の可能性が示される。ミルの社会主義論の理解のためにより重要なのは、ミルがこのような両義的な制度改革を示唆していることである。なぜなら、研究者によるミルの社会主義論の解釈は、私有制の改善か、それとも究極の体制としての共産主義かのいずれかの方向に力点が置かれて解釈され、ミルの体制論の両義性が看過ないし過少評価される場合が多いからである。ミルが半面の真理を重視する方法を採用し、資本と労働の立場を一方に片寄ることなく体制の問題を経験的に判断すべきとした意図が無視ないし軽視されていることが問題なのである。

「遺稿」の評価をめぐって、対立する解釈をするのはシュンペーターとロビンズである。シュンペーター(*Joseph A. Schumpeter, 1883-1950*) はミルを進化論的社会主義者として捉え次のように述べる、

全体として社会主義に対する多くの懸念を表明する「遺稿」は、恐らく有用というよりは、むしろ人を誤らすものであろう。ミルの社会主義への反対は、単に、人類が社会主義に対して準備のできていない状態にあることによるという趣旨のものである。ミルによる『経済学原理』第3版の所説の変更や修正は注目されるべきである。とりわけ、「将来の見通し」の章の新しいパラグラフは、究極の目標としての社会主義の明

示的な承認にほかならない。革命による社会の転換を拒否するミルの社会主義は、進化的社会主義とみられるのである (Schumpeter 1954, 531, 532/ (中)287-289 頁)。

シュンペーター説の根拠は二つあると思われる。その一つはミルが「所有論」(第3版)で「共産主義において異種労働の困難性があるからといって、共産主義が理想の制度ではないことを立証したわけではない (CWII 207/ (2)33 頁)」と述べていること、もう一つの論拠は、ミルが「将来の見通し」の章 (第3版)で、私有制からパートナーシップを経て労働者アソシエーションへの体制変革を述べていることであろうとみられる。しかしながら、初めの論点は、ミルが「理想的な形における私有制 (Ibid.207/ (2)29 頁)」と「最善の状態における共産制 (Ibid.)」との公平な比較による体制の選択を述べているところである。たとえミルが、人類の理想の体制とみなされている共産主義という表現を用いているとしても、ミルが共産主義だけを理想の体制と思っているとは限らない。なぜならミルは、体制比較の結果、最善の状態における共産主義が選択されない可能性があるからである。ミルは科学的に公平な体制比較のために、改善を重ねた理想的な私有制と、困難な諸問題を解決した最善の状態にある共産制との実験的な比較がのぞましいといっているのであって、比較する前に共産制だけを理想の制度として社会改革の目標に決め手いるわけではないからである (CWII 206-208/ (2)28-31 頁)。

シュンペーターのもう一つの論拠は、第3章でみたように、ミルがハリエットの要求に応じて、体制変革を予測する思想を『経済学原理』第4編 (第3版) に挿入したところである (CWI 255/ 343 頁)。そこではミルが彼女の思想を自分の思想体系に組み入れたのかどうか問題となる。だがハイエクがミル夫妻の往復書簡を公開してから行われたミルに対する彼女の影響に関する論争の成果や、ミルの思想の全体像からみると、シュンペーター説のように、ミルが社会改革の理想の制度として共産主義を承認したという解釈には疑問が生じる。1960年代の論争については、第3章で検討したので、ここではミルの思想的特質から解釈することにしよう。

ミルが「所有論」で体制の問題を未決にしているのは、まずミルの経験主義に基づく判断がある。ミルは人間の最大幸福を目指すアートの課題を、いかなる制度が人間の幸福を増進するか、観察や実験によって経験的に探究することを社会科学に託した。そして、その課題は人々が教育によって知的道徳的に人間性を高め、私有制の改善と困難な問題を克服した共産制が最善の状態において、判断し選択するというから問題は未解決 (an open question) である。ミルの方法による体制選択の結果は共産主義とは限らないのである。その上、ミルは自由主義者として、矛盾の存在とその解決への努力を社会の進歩の条件と考えるから、体制の問題は、常に火のあてられる未解決の問題となるのである。次に疑問とされるのは、ミルは人類が究極の目標を共産主義として歴史的過程をたどるという決定論的な歴史観をもっていなかったのではないかという疑問である。「将来の見通し」の章でミルは、人間の歴史が自然発生的に労働者アソシエーションの体制へと移行するという必然的な推移が述べられている。しかしこれは、二月革命以降、労働者アソシエーションへ

の体制移行を社会改革の使命として考えるハリエットの要求にミルが同調したことの帰結として考えられる。労働の尊厳(二次的アート)が脅かされる体制は変革されるべきであるとはいえ、新しい体制は人間の自由と自発性を最大限に発揮する体制でなければならず、それはなお未知なのである。労働者アソシエーションへの体制移行を社会改革の要とするハリエットの思想の表現であり、彼女の強い主張にミルが妥協した結果としてみられる。彼女と異なり、ミルが進化論的あるいは決定論的な歴史観をもっていなかったことは、フォイア (Feuer 1976, 90,91/ 171,172 頁) やコリーニ (Collini 1983, 146/ 122,123 頁, 151/ 128 頁) が指摘しており、サン・シモン主義を批判し歴史の多様性を重視するミルの歴史観からみてもシュンペーター説には疑問が残るのである。

しかしシュンペーターほど明快に述べているわけではないが、第3版の改訂にミルの主張の意義を認める研究は、福原 (1956年 118-123 頁)、ライアン (Ryan 1984, 145,151,157)、キューラー (Kurer 1992)、ライリィ (Riley 1996)、武田 (1998年)、四野宮 (2002年)、ミラー (Miller 2003, 213)、レヴィン (Levin 2003, 68,69)と近年まで有力である。

これに対し、第3版の改訂の意義を重視するのを諫めるのはロビンズである。ロビンズ (Lionel C. Robbins, 1898-1984) は、『経済学原理』初版から第3版への重大な変化と「遺稿」の初版への部分的な回帰は否定しがたいが、この変化をあまりにも積極的に解釈することはミルの真意を誤解する恐れがあると述べる。ロビンズはミルの社会主義論の最終的な立場を「遺稿」にみて次のようにいう。

ミルは「所有論」では体制の問題を、比較してどちらがすぐれているのかという問題として捉えるが、その答えは未解決の問題とする。ミルは私有制の改善と社会主義への可能性を等置しているのである。そして「将来の見通し」の章(第3版)はハリエットの示唆によって書き改められたのであるが、ミルはパートナーシップを経てサンディカリズム的な生産協同組合への漠然とした上昇を述べたに過ぎない。ミルの真意はあらゆる体制に対して偏見のない考えを求め、あらゆる体制を仮のものとして捉える思想である。ミルの最終的な結論は「遺稿」において述べられている。『経済学原理』第3版以降と「遺稿」の間にみられる問題の扱い方の相違は明白である。しかし注意すべきは、ミルがうわべは純粋に知的な人のように見えるが、実際にはもっとも感情的な著述家のひとりであったことだ。彼のそのような性格が時の流とともに、気分が変わるにつれて時折矛盾を生み出す源となったのである (Robbins 1961, 151-168/ 131-146 頁)。

ミルの社会主義論を「遺稿」に集約される一貫性のある議論として解釈するのは、古くはミルの友人のペインである (Bain 1882, 90/ 108,109 頁)。ロビンズ以降、ペインやロビンズに近い解釈をするのは、ミルのハリエットに対する感情的な動機を認めるシュヴァルツ (Schwartz 1972, 190-192)、ミルの主要な関心を競争と利己心にて、科学者ミルの思想の一貫性をいうホルンダー (Hollander 1985, vol.2, 791,820-823)、ミルの社会主義論を自律 (autonomy)の概念を軸にみて、ロビンズ、シュヴァルツ、ホルンダーに賛成するキャ

パルディ (Capaldi 2004, 222,223)である。またシュンペーター、ロビンズとは異なる解釈をするのは、杉原 (2003年)、馬渡 (1997年)、前原正美 (1998年)、ローラ・ドウ・マッtos (Laura de Mattos 2000)、前原直子 (2011年)、ローゼン (Rosen 2013)である。

しかしこれらの研究者による解釈がそれぞれ異なるといえども、その解釈の根底には『経済学原理』第3版の改訂の意義と「遺稿」の評価の問題があり、この問題に対する認識の違いをできるだけ狭めることによって解釈の幅が近くなることが期待される。このために、ミルに対するハリエットの影響を再評価する (Schwartz)とともに、ミルの社会主義論の時代的背景とミルの思想的特質との関連による慎重な検討 (杉原)が要請されている。本稿は二つの解釈のうち、基本的にはペイン、ロビンズの立場にたつてシュンペーター説を批判するが、その一方で、シュンペーターの解釈の背景にあるミルの分配的正義をはじめとする二次的アートを評価しつつ、ミルの思想形成と思想の全体像からの解釈につとめることを課題とするものである。

第6章 (ミルの社会主義論に対する評価とエッカリウス (マルクス)のミル批判) と

第7章 (マルクスのミル批判に対するミルの思想からみた反論) では、マルクスのミル批判と、マルクスの批判に対するミルの思想からみた反論を採りあげる。シュンペーターはマルクスのミル批判がミルの思想の核心をついており、ミルの社会主義論を理解する上で極めて重要であると述べる (Schumpeter 1954, 531,532/ (中)288,289 頁)。

ミルとマルクスは、ともに人間の自由を追求する社会改革を図った点では共通しているが、マルクスはミルを厳しく批判した。マルクスの批判は二人の改革の哲学と方法が異なり、改革の姿勢に差異があることによるとみられる。資本主義体制の革命的転換を図るために第1インターナショナルの理論的指導を行っていたマルクスにとって、イギリスの労働運動の指導者たちに影響力のあったミルの思想は何にもまして障害であった。だがマルクスは自分の名前で直接ミルを批判せずに労働者エッカリウスに論文を書かせてミルを批判したのである。マルクスはミルの思想を鋭く洞察して、ミルの思想的特質に基づく理論の展開を誤りとして批判することになる。マルクスの批判の要点をみることにしよう。

マルクスはミルの社会科学の方法を、魂の抜けた折衷主義であり、調和されえないものを調和しようとして、ないものねだりをしていると批判する。ミルの方法では、資本主義社会の資本と労働という基本矛盾を捉えて、剰余価値の秘密に迫ることができない。そしてミルが資本主義経済の生産関係を正しく把握し、分配の不平等を認識しておりながら、市場競争と私有制を自明の前提とするブルジョワ経済学の立場にたつとともに、唯物史観に基づく歴史観が欠如しているから、プロレタリアによる体制変革という歴史的使命を理解しない。ミルは資本主義的生産関係を固定化して、人間の意志による分配関係の可変性だけで資本主義社会の矛盾の解決を図ろうとしていると批判するのである。

しかしエッカリウスに書かせたマルクスのミル批判で不可解のことは、ミルの社会主義論の核心の一つである「将来の見通し」の章が無視されている。なぜなのであろうか？先

ず考えられることは、革命的でなく進化論的な過程を経るにせよ、競争と私有財産を基礎とする現体制から、ミルが労働者アソシエーションへの体制変革をミルが予測しているとするならば、ミルの社会改革の目指す目標は変化の道筋を別とすればマルクスに近い。もしそうであるなら、マルクスのミル批判は矛先が鈍ることになり、ミルを否定しようとするマルクスの意図に合わないことになる。次に考えられるのは、「将来の見通し」の章が、「所有論」をはじめとするミルの思想とは異質であることをマルクスが鋭く見抜いて「将来の見通し」の章を批判の対象から除外した可能性はある。しかしマルクスはこの点について何も言及していないので、明らかではない。

マルクスのミル批判に対して、もしミルの立場から反論するとすれば、ミルが市場競争と私有制を前提とした経済学の立場にたっていると批判するマルクスは、ブルジョワ経済学の立場にたつ「ニューマン経済学」をミルが批判したように、ミルは市場競争と私有制を自明の前提とせず、経済体制に関する問題意識を高めることの重要性をミルが強調している事実を看過している。ミルはサン・シモン派の影響を受け、私有制を自明の前提とした政治経済思想を唱えるベンサムや父ミルの思想の欠陥を見抜いて社会科学の歴史性の重要なことを指摘した。それにもかかわらず、ミルは『経済学原理』で市場競争と私有制を前提とした経済学を展開した。この点はマルクスのいう通りであるとしても、ミルによれば、それは科学的な判断に基づく体制変化がなされるまでの暫定期間の経済学なのである。もし暫定期間が過ぎて体制が変わったならば、ミルにおいてもその体制に即した経済学があるはずである。しかしマルクスにとっては、永遠に続くかもしれない暫定期間を設けて体制の問題を未決にするミルの思想は受け入れ難く、ブルジョワ経済学として拒否されるべきものなのである。ミルは所有と制度の多様性をみて、体制の問題を科学の対象として探究し社会改革のための活用を図ったのであり、理論と実践を相即とするマルクスとは改革の姿勢が異なる。しかしこのようなミルとマルクスとの差異は二人の哲学の異質性に顕著にみられる。マルクスはヘーゲルの観念弁証法を批判する一方で、ヘーゲルの方法論的全体論を継承して、唯物弁証法を社会科学の方法とする。これに対し、ミルはベンサムの個人主義的方法論を継承するとともにミルの弁証法は思考の弁証法である。ミルはギリシャ哲学とロマン主義から半面の真理の折衷的総合を学び、『論理学』第6編では自由と必然との調和を基礎として「実践の論理」を展開し、「実践の論理」を体制論に適用したと解釈される。マルクス主義が社会主義の科学性を強調するのに対し、ミルの社会主義論においては科学は常にアート(目的論)との相互依存の関係にある。そしてマルクスの決定論的な唯物史観に対してミルの歴史観は精神史観である。経済的な要因が動力となって歴史的社會を変化させるとみる唯物史観と異なり、ミルの精神史観は人類の歴史的進歩の動因に人間の精神をみる。それは先験的なイデオロギーによる進歩史観ではなく、アートと科学の調和する自由な思想の展開が人間の精神の進歩を促し社会制度を変化させると考える。ミルはコントやサン・シモン派の動的な歴史観を批判的に継承し歴史社會の法則性を認めながら、多様性に富む社會の歴史は単一の法則性をもって決定論的に推移するとは考えない。

ミルにおいては、人間が経験主義的に捉えた法則性を制御し、よりよい制度を選択するのであるから、選択する人間の知的道徳的水準を高めないといけない。ミルの社会改革では教育が重視され、倫理と科学の調和する改革がなされなければならないのである。

最後に一部繰り返しとなるが、マルクスと異なるミルの社会主義論を結論的に要約すると、次の通りである。

社会改革の究極のアートは人類の幸福の増進であり、人間性の完成を目指すアートである。人間性の完成のために精神の内的陶冶と人びとの知的道徳的水準の向上を図る教育とともに、人間性に逆らわない制度の改善が求められる。社会主義者の指導原理である分配的正義、労働の尊厳、勤労の組織化は功利の原理に従属する二次的アートである。科学はアートに課題を与えられて、人間の自由と自発性を最大限に発揮することと二次的アートとが両立する制度であるとともに、競争原理を生かして経済的原動力を活性化し、労働配分に対して人びとに不満のない制度を、複数の制度を比較しながら実験や経験によって科学的に探究する。自由放任の私有制と革命的な共産制を除いた制度の比較検討は、改善された私有制と難題を克服した共産制の両体制を対極として、両体制の最善の状態と比較されるのがのぞましい。その制度は中央集権や官僚の肥大化を排し、分権的で民主的であると同時に、体制の選択も民主的、漸進的に行われるものとする。その体制の選択は「時代と場所と環境に適する制度」を選択するものとし、その選択肢はできる限り広いほうがよい。ミルの意図する社会改革は、制度面とともに教育による人びとの精神の陶冶に依存するから容易ではない。私有制における経済的調和は市場の自動調節作用によってなされるが、共産主義における経済的調和のためには、人びとの利己心を克服するよう教育による高い知的道徳的が要請される。私有制は教育の困難性と財産を失なわなうまいとする人びとの保守性によって永続性を保つが、人間の所有の観念は可変性を有するから、私有制と共産制のいずれの制度もありうるのである。人びとが当面なすべきことは、私有制を転覆することなしに、教育の普及とともに二次的アートの課題に応える私有制の改善とアソシエーションの実験を絶えず重ねることによって、経験的に体制を比較しつつ選択を行うことである。自由主義によれば、矛盾とその解決への努力は人間と社会の進歩の条件なので、体制の問題は「新しい光が当てられる未解決の問題」であり続けることになる。プラトンとアリストテレスが提起した所有と制度の問題は、両者の思想を半面の真理として含意しつつ、人類にとって古くて新しい永遠の課題となったのである。

第8章ミルの体制論の倫理と科学

財産の私有か共有か、あるいはいかなる所有制度が人類の幸福を促進するのかという所有と制度の問題は、古くプラトンとアリストテレスによって提起され、ロックやルソーの対立する思想を経て、後世の思想家たちによってさまざまな議論がなされた。ミルはこの問題を科学の対象として探究する課題として取り組んだが、ミルの方法論を含む思想的特

質により結論を明示することはなかった。ミルが体制論の結論を未決にしたことにより、ミルの社会主義論はその解釈が分かれることになった。この異なる解釈を生む主たる理由は、人間や社会における真理の多様性をみるミルの方法論と彼の叙述の仕方による。ミルは時として半面の真理を強調しながら逆の半面の真理に言及することをせず、逆の半面の真理を別の文脈において叙述するので、はじめの半面の真理を強調する叙述にとらわれるとミルの主張の理解を誤ることになる。しかしながら、ミルの思想の全体像からみるとミルの社会主義論の主張は一貫性を有しているので、その一貫性にミルの真意を読むことにより研究者の解釈の隔たりを狭めることは可能であると期待される。

ミルは18世紀啓蒙思想を批判しそれと対立する新しい思想を18世紀と19世紀の思想の闘いとして捉え、啓蒙思想を保持しながら新しい思想との融和を図った思想家であった。父ミルから薫陶を受けたギリシャ哲学を基礎として、ミルは功利主義に対してロマン主義、自由主義に対して社会主義が調和する可能性を探った。ミルはベンサム主義を継承しながらロマン主義的自由主義を受容し、ミル独自の功利主義、自由主義と経験主義の思想のもとに、『論理学』で展開した方法論を基礎として比較体制論を主張した。ミルの社会主義論はミルが18歳のオウエン主義批判から「遺稿」に至るまで、思想的立場の変化、思想の成熟度、時代的文脈の違いによって主張の力点の置き方に濃淡の差があるものの、ミルの主張の核心的な部分は変わらず、現代のわれわれにも体制に関する考察に対して示唆を与えてくれるのである。

ミルの思想には多様性ととも将来の問題を見通す先見性がある。ミルは人間の所有の観念の可変性から、共産主義を含むあらゆる体制の選択の可能性を認めた。しかし共産主義社会において、官僚化が進み人間の自由が失われることを懸念し、人びとの知的道徳的水準に見合う制度を選択することなしには、たとえ共産主義革命が起ころうとも、制度的な失敗を招くであることを予見した。われわれはミルとマルクスの時代から1世紀半を経過し、ロシア革命（1917）とソヴィエト体制の崩壊（1991）という二つの体制移行、およびその後の新自由主義による市場経済の可能な限りの規制緩和のもたらす問題という歴史的推移を体験した。ミルが探究し求め続けた社会的実験の一部をわれわれが経験したことになる。世界のグローバル化が進展し社会がますます多様化している現在、倫理と科学の調和を求め、多面的な視角から社会改革を図るミルの社会思想を再評価することは時宜を得ることと考えられるのである。

引用文献

I. ミルの著作

CWI (1873) *Autobiography and Literary Essays*, 山下重一訳注『評註ミル評伝』御茶の水書房、2003年。

CWII, III (1848-71) *Principles of Political Economy with Some of Their Applications to Social Philosophy*, 末永茂喜訳『経済学原理』岩波文庫、(1)-(5), 1959-63年。

CWIV (1845) “The Claims of Labour”.

CWV (1851) “Newman’s Political Economy”.

— (1879) “Chapters on Socialism”, 永井義雄・水田洋訳「社会主義論集」『世界の大思想』Ⅱ、河出書房、1967年。

CWVII, VIII (1843) *A System of Logic : Raciocinative and Inductive*, 大関将一・小林篤郎訳『論理学体系』(1)-(6)、春秋社、1949-59年。

CWX (1838) “Bentham” 川名雄一郎・山本圭一郎訳「ベンサム」『功利主義論集』京都大学出版会、2010年。

—(1840) “Coleridge” 柏經学訳「コールリッジ論」『J. S.ミル初期著作集』(4)、御茶の水書房、1997年。

—(1861-71) *Utilitarianism*, 水田珠枝・永井義雄訳「功利主義」『世界の大思想』Ⅱ、河出書房、1967年。

—(1865, 66) *Auguste Comte and Positivism*, 村井久二訳『コントと実証主義』木鐸社、1978年。

CWX II, X III (1812-48) *The Earlier Letters*.

CWX IV, X V (1849-69) *The Later Letters*.

CWX VIII (1859-69) *On Liberty*, 塩尻公明・木村健康訳『自由論』岩波文庫、1971年。

— (1835,40) “Tocqueville on Democracy in America” (1) (2), 山下重一訳「トクヴィル氏のアメリカ民主主義論」『J. S.ミル初期著作集』(3)、御茶の水書房、1980年。

CW XIX (1861) *Considerations on Representative Government*, 水田洋訳『代議制統治論』岩波文庫、1997年。

— (1849) “Vindication of French Revolution of February 1848”.

CW XXVI (1869) “Closing Speech”.

II. 一次文献

Brougham, H.P. (1849) “The French Revolution of 1848”, *Westminster Review*, April 1849.

Eccarius, J.G. (1866,67) “A Workman’s Refutation of J. S. Mill”, *The Commonwealth*.

— (1868) *Eines Arbeiters Widerlegung der nationalökonomischen Lehren John Stuart Mill’s*, Göttingen, Zürich : Verlag der Volksbuchhandlung.

Helps, A. (1844) *The Claims of Labour, An Essay on the Duties of the Employers to the Employed*, London : Irish University Press.

Newman, F. W. (1851) *Lectures on Political Economy*, John Chapman.

Thompson, W. (1824) *An Inquiry Into the Principles of the Distribution of Wealth, Most Conductive To Human Happiness*, Longman, Hurst Rees, London: 1 Orme,

Brown and Green, 鎌田武治訳『富の分配の諸原理 1,2』京都大学学術出版会、2011,12年。

II. 二次文献 (欧文献)

- Ashley, W. J. (1909) "Mill's earlier and later Writings on Socialism", *Principles of Political Economy* (ed.), London : Longmans.
- Bain, A. (1882) *John Stuart Mill: A Criticism with Personal Recollections*, London : Longmans, Green、山下重一・矢島杜夫訳『J.S.ミル評伝』御茶の水書房、1993年。
- (1882) *James Mill, A Biography*, London: Longmans Green.
- Beer, M. (1919,20) *A. History of British Socialism*, G. Bell and Sons, 大島清訳『イギリス社会主義史』岩波文庫、1968-75年。
- Berlin, I. (1969) *Four Essays on Liberty*, London, Oxford and New York : Oxford University Press, 小川晃一ほか訳『自由論』みすず書房、1971年。
- Bliss, W. D. P. (1891) *Socialism by John Stuart Mill*, "Introduction", The Humboldt Publishing, 石上良平訳『J.S.ミル「社会主義論一遺稿」』社会思想研究会、1950年。
- Borchard, R. (1957) *John Stuart Mill—the Man*, London : Watts.
- Capaldi, N. (2004) *John Stuart Mill : A Biography*, New Orleans, Cambridge University Press.
- Claeys, G. (1987) "Justice, Independence, and Industrial Democracy: The Development of John Stuart Mill's Views on Socialism", *Journal of Politics*, 49:1.
- Collini, S. (1983) "The tendencies of things : John Stuart Mill and the philosophic method", 坂本達哉訳「ものごとの傾向—ジョン・ステュアート・ミルと哲学の方法」、*That Noble Science of Politics—A study in nineteenth century intellectual history*, Cambridge University Press, 永井義雄・坂本達哉・井上義朗訳『かの高貴なる政治の科学』ミネルヴァ書房、2005年。
- Duncan, G. (1973) *Marx and Mill—two views of social conflict and social harmony*, Cambridge University Press.
- Feuer, L. S. (1976) "John Stuart Mill as a Sociologist : The Unwritten Ethology", *James and John Stuart Mill / Papers of the Centenary Conference*, University of Toronto Press, 泉谷周三郎訳「社会科学者としての J. S.ミルー書かれざる性格学」『ミル記念論集』木鐸社、1979年。
- Gray, J. and Smith, G. W. (eds.) (1991) *John Stuart Mill's On Liberty in Focus*, London : Routledge, 泉谷周三郎・大久保正健訳『ミル自由論再読』木鐸社、2000年。
- Hayek, F. A. (1951) *John Stuart Mill and Harriet Taylor ; Their Correspondence and*

- Subsequent Marriage*, London : Routledge & Kegan Paul.
- Hollander, S. (1985) *The Economics of John Stuart Mill*, vol.1,2, Oxford : Basil Blackwell.
- Jacobs, J. E, (1998) *The Complete Works of Harriet Taylor Mill*, Indianapolis : Indiana University Press.
- (2002) *The Voice of Harriet Taylor Mill*, Indiana University Press.
- Kurer, O. (1991) *John Stuart Mill : The Politics of Progress*, NY & London : Garland.
- (1992) “John Stuart Mill and Utopian Socialism”, *The Economic Record* 68.
- Laura de Mattos, V. (2000) “John Stuart Mill, Socialism, and his Liberal Utoia : an Application of his Views of Social Institutions”, *History of Economic Ideas* VIII.
- Levin, M. (2003) “John Stuart Mill : A Liberal looks at Utopian Socialism in the years of Revolution 1848-9”, *Utopian Studies*, vol.14-2.
- Miller, D. (2003) “Mill’s Socialism”, *Politics, Philosophy & Economics*, 2.
- Packe, M. ST. J. (1954) *The Life of John Stuart Mill*, New York : Macmillan.
- Pappe, H. O. (1960) *John Stuart Mill and Harriet Taylor Myth*, Victoria : Melbourne University Press.
- Rawls, J. (1999) *The law of peoples*, Harvard University Press, 『万人の法』 中山竜一訳、岩波書店、2006年。
- Reeves, R. (2007) *John Stuart Mill: Victorian Firebrand*, London: Atlantic.
- Riley, J. (1996) “Mill’s Liberal Utilitarian Assessment of Capitalism Versus Socialism”, *Utilitas*, vol.8.
- Robbins, L. (1966) “Socialism” in the Introduction of *Essays on Economics and Society* by John Stuart Mill, *CWV*.
- (1978) *The Theory of Economic Policy in English Classical Political Economy* (2nded.), London : The Macmillan Press/ 市川泰治郎訳『古典派経済学の経済政策理論』 東洋経済新報社、
- Robson, J. M. (1968) *The Improvement of Mankind*, Toronto : University of Toronto Press.
- Rosen, F. (2013) *Mill, Founders of Modern Political Political and Social Thought*, Oxford, Oxford University Press.
- Ryan, A. (1984) *Property and Political Theory*, Oxford and New York : B. Blackwell.
- (1987) *Property*, Open University Press.
- Schofield, P. (2006) *Utility and Democracy – The Political Thought of Jeremy Bentham*, Oxford University Press.
- Schumpeter, J, A. (1954) *History of Economic Analysis*, London : Georg Allen Unwin/ 東

- 畑精一・福岡正夫訳『経済分析の歴史』(中) 岩波書店 2006年。
- Schwartz, P. (1968) “John Stuart Mill and Socialism”, *Mill Newsletter*, 4-1, London.
- (1972) *The New Political Economy of John Stuart Mill*, London : Weidenfeld and Nicolson.
- Skorupski, J. (2006) (1) *Why read Mill Today?*, London : Routledge.
- (2006) (2) “The Place of Utilitarianism in Mill’s Philosophy”, *The Blackwell Guide to Mill’s Utilitarianism*, Oxford : Blackwell Publishing.
- Smart, P. (1991) *Mill and Marx—Individual liberty and the roads to Freedom*, Manchester University Press.
- Stillinger, J. (1961) *The Early Draft of John Stuart Mill’s Autobiography*, “Introduction”, Urbana ; University of Illinois Press.

IV. 二次文献 (日本語文献)

- 早坂忠 (1968年) 「J. S.ミルの社会主義論についての一考察」、東京大学教養学部『社会科学紀要』17.
- 深貝保則 (1990年) 「J. S.ミルの経済と倫理—科学・経済人・功利性」『山形大学紀要』21-1.
- 福原行三 (1956年) 「J. S. ミルの社会主義思想についての一考察」『大阪府立大学紀要』人文・社会科学編第4巻。
- 土方直史 (2011年) 「ウィリアム・トンプソンにおける功利主義と経済思想」『功利主義と政策思想の展開』中央大学出版部。
- 泉谷周三郎 (1980年) 「ハリエット・テイラーとの親交」『J. S.ミル初期著作集』(2) 御茶の水書房。
- (2013年) 「J. S.ミルとロマン主義—ワーズワス、コールリッジ、カーライルとの関わり」、有江大介編著『ヴィクトリア時代の思潮と J.S.ミル—文芸・宗教・倫理・経済』、三和書籍。
- 小泉仰 (1997年) 『J. S.ミル』研究者出版。
- 前原正美 (1998年) 『J. S.ミルの政治経済学—ミルの停止状態論と国家』白桃書房。
- 前原直子 (2011年) 「J. S.ミルの理想的的市民社会論と株式会社論」『経済学史研究』52-2。
- 馬渡尚憲 (1997年) 『J. S.ミルの経済学』御茶の水書房。
- 四野宮三郎(2002年) 『J. S.ミル思想の展開Ⅲ』御茶の水書房。
- 杉原四郎 (2003年) 「J. S.ミルと現代」『杉原四郎著作集Ⅱ』藤原書店。
- 高草木光一(2005年) 「アソシアシオン概念をどう捉えるか」『ロバート・オウエン協会年報』(30)。
- 武田信照 (1998年) 『株式会社像の転回』梓出版社。
- 竹内洋(1984年) 「J. S.ミルの『経済学原理』と「社会主義論」—一つの方法論的素描—」『経済と経済学』東京都立大学経済学会。

- 矢島杜夫（1993年）『ミル「論理学体系」の形成』木鐸社。
—（2001年）『ミル「自由論」の形成』木鐸社。
- 山下重一（1999,2000年）「J. S.ミルとハリエット・テイラー」（1)-(3), 『国学院法学』
37-2-4。
—（2003年）『評註ミル評伝』御茶の水書房。
- 安井俊一（2003年）「J. S.ミルの社会主義論とハリエット・テイラー」『三田学会雑誌』
96-1。
—（2013年）「オウエン・トンプソン・J. S.ミルーヴィクトリア時代のアソシエー
ション論」、『J. S.ミルとヴィクトリア時代の思潮』三和書房。
—（2014年）『J. S.ミルの社会主義論—体制論の倫理と科学』御茶の水書房。